

2025年度(令和7年度)事業報告

運営に関する事項

(1) 理事会・評議員会の開催

- | | | |
|----------|------|----------------------------------|
| ○第1回理事会 | 6／ 9 | 令和6年度事業報告及び決算報告についてほか(中央センター) |
| ○第1回評議員会 | 6／26 | 令和6年度事業報告及び決算報告についてほか(中央センター) |
| ○第2回理事会 | 8／22 | 給与規程の改定について(書面開催) |
| ○第3回理事会 | 12／1 | 令和7年度上半期事業報告及び執行状況についてほか(中央センター) |
| ○第4回理事会 | 3／12 | 令和8年度事業計画及び予算についてほか(中央センター) |
| ○第2回評議員会 | 3／26 | 令和8年度事業計画及び予算についてほか(中央センター) |

(2) KES認証の継続

2008(平成20)年5月に受けたKES(ステップ1)の認証を継続(確認審査合格)し、環境負荷の軽減を意識した法人・施設運営に努めた。

(3) SDGsに沿った事業・組織運営

SDGsの各項目と事業とを紐づけて実施するとともに、取組内容を定期的にSNSで発信した。

(4) 中期経営計画の策定、人事・給与制度の見直し

中期経営計画に沿った事業・組織運営を行うとともに、人事評価制度の試行実施し、将来的な導入に向けた検討を進めた。

(5) 各種助成金・寄付金等の獲得

行政からの指定管理・委託のほか、市民からのご寄付や民間助成金等を得ることができ、各種事業の維持・拡充につながった。

I. 協会(本体)事業

協会自主財源を原資として以下のように実施した。

1. ネットワーク形成事業

若者の成長を支援する様々な領域・地域の団体等の活動が、有機的につながるネットワーク形成を目指し、そのハブとしての役割を協会が果たせるよう、協会の持つ“資源”をもって、外部機関・団体との連携・協力を行った。

(1) 若者に関わる機関・団体・人のネットワーク形成と連携を拡げる事業

① 外部機関・団体と構成する実行組織への参画

行政機関、他団体に委員等を派遣した。(京都市関連／他公益団体関連のうち主なもの)

- | | |
|------------------------|----------------------------|
| * 京都市はぐくみ推進審議会(委員) | * 京都市子どもを共に育む市民憲章推進協議会(委員) |
| * 京都市HIV感染症対策有識者会議(委員) | * 京都市国際交流・多文化共生審議会(委員) |
| * 京都市市民参画推進フォーラム(委員) | * 京都市ケアラー支援推進協議会(幹事) |
| * 京都市はぐくみネットワーク(幹事) | * 京都市福祉ボランティアセンター(運営委員) |
| * 京都市市民活動総合センター(運営委員) | * 京都府キャンプ協会(理事) |
| * 京都市児童館学童連盟(理事) | * 京都市国際交流協会(評議員) |
| * 京都市社会福祉協議会(評議員) | * 京都YMCA(評議員) |

② 青少年団体、青少年育成・支援団体との事業共催・後援・協力

育成団体・外部機関・関係団体からの希望に応じて共催・後援・協力をした。(共催1件、後援2件、協力2件)

③ 若者の支援等にかかわる人のネットワーク形成・中間支援

単独で実施することはなかったが、団体交流会における研修等と合わせて、その機能を担った。

2. 社会的な課題に対応した事業

若者を取り巻く社会的な課題に関する各種事業を実施した。

(1) 学校連携事業(京都市教育委員会よりの委託ほか)

- 京都奏和高校における校内居場所カフェ「憩いの場」及び体験と交流の場づくり「Quintetto」を運営。
- 来室者数は増加傾向だが、ボランティアやインターンを積極的に受け入れ、安定した運営ができた。
- 毎年恒例の企画にも新たな要素を取り入れ、生徒にとって多様な出会いの機会となった。
- 掲示版や通信を活用した情報提供により、青少年活動センターへ足を運ぶ生徒が増えている。
- 居場所づくり支援のほか、学校の授業への協力依頼も受け、実施に協力した。

(2) ゆうすぺーすやましな(京都市山科区よりの委託)

- 山科区からの依頼に応じて、地域で機能的に取り組むため、山科青少年活動センターの運営と連動させるとともに、特定非営利活動法人山科醍醐こどものひろばと協同で週2回の居場所を運営した。
- 大学関係者とのラウンドテーブルの機会を設定し、若者の場づくりにつなげるための意見交換を実施した。
- 別途、DIYで「居場所づくり」ワークショップの委託を受け、京都橘大学の学生とともに「ゆうすぺーすやましな」の広報や場の魅力向上に向けた取組を実施した。

(3) SRHR(Sexual and Reproductive Health and Rights)に関する取組

- 各青少年活動センターにセクシュアルヘルス担当者を置き、担当者会を実施した。
- LGBTQフレンドリーなユースセンターづくりの一環として、レインボーの缶バッジを各事業所の職員が身に着けた。
また、必要な若者にコンドームの配布を行う取組を実施した。
- 職員のスキルアップの機会として、外部講師による研修を実施したほか、他団体への取組に協力するなどした。

(4) ニーズに対応した新規事業の実施

① 能登半島地震・豪雨災害への支援

- 令和6年度に引き続き、石川県輪島市にある若者の場づくりに取り組むNPO法人じつくらあとへの支援として、令和7年度は1年間職員1名を出向させ、現地での実践に協力した。

3. ケア事業

複合的な困難を有する若者が孤立しないよう、つながりづくりを基軸としたケア機能を有した事業を行った。

(1) 子ども・若者ケアラー支援事業（一部 京都府よりの委託）

- 子ども・若者ケアラー当事者のつどい「いろはのなかまたち」を月1回実施（京都府オンラインコミュニティ事業）。通常回は対面とオンラインで参加できるよう整備した。隔月でイベント回を設定し、話すだけではない体験も取り入れた。
- 講師派遣、関係機関との会議等を通じた若者の声の発信に取り組んだ。
- 京都市ケアラー支援条例に基づく「ケアラー支援推進協議会」に参画した。
- 立命館大学CAREFILプロジェクトに参画し、若者ケアラーへの社会資源開発や問題提起に取り組んだ。

(2) 社会的養護自立支援・子ども若者ケアラー支援等拡充事業(寄付金を基にした取組)

- つながり・レスパイト拠点として「おりおりのいえ」の運営を行った。（日中延べ723名、宿泊延べ165泊）
- 自活に向けた体験とSOSが出せる関係づくりのために、たき火旅を実施した。
- 株式会社岡野組よりご寄付をいただき、テラス改修や二重窓などの安全対策に取り組んだ。
- 事業継続のため、助成金を獲得して取り組んだ。（野村グループみらい基金、ブリヂストンB-Smile基金、24時間テレビチャリティー基金）
- NPO 法人サンカクシャ「家賃補助プロジェクト」に参画し、3名の若者に半年間の継続的な伴走支援を行った。
- 緊急支援等としての給付を実施した。9名に対して、計1,182,000円を給付。
- 周知・啓発と、岡野組への感謝状贈呈の場として、2周年の活動報告会を行った。（共催：認定 NPO 法人かものはしプロジェクト）

(3) 社会的養護自立支援事業

（後掲）

4. 社会参加促進事業

若者が多様なコミュニティに主体として参画できること、政策の決定過程において若者の意見や活動が尊重される仕組みがあること、日常の中に若者の声が反映される機会があることを目指し取り組んだ。

(1) シティズンシップ形成・意見形成につながる取組

- 協会独自のシティズンシップ形成事業の開発・実施・伝えていく仕組みづくり
＊7月の参院選に伴った投票企画や、「京都市地域コミュニティと市民参加に関するビジョン」策定に伴うパブリックコメント企画を開催し、若者が気軽に自分の意見を表明できる機会とした。

(2) 各事業所における多様な若者の「参加・参画」の共有及び評価

- 昨年度抽出した各事業所からの若者の社会参加・参画に関するエピソードについて、チーフ会で取り扱い、エピソードの共有や「社会参加・参画」に関する意見聴取に取り組んだ。

(3) 若者との協同実践

- ①ユースカウンスル京都との協働
 - 若者からの視点で必要と考える場づくりや政策提案、市政参加ができる仕組みづくりとしてのローカルユースカウンスルが機能するよう、「ユースカウンスル京都」の運営をサポートするとともに、協働した。
 - 新規プロジェクトとして「若者の居場所づくり」チームが発足。ふらっと来られる居場所「だべらんど」の定期開催をサポートした。
 - 育成団体である「きものどれっしんぐ京都」と連携した「かき氷企画」の実施に協力した。初めて伏見青少年活動センターで開催し、新たな利用者層への周知につながった。
- ②若者からの提案に基づいた事業協同
 - 自身の自主的な取組に関して「何かに活かしたい」と提案のあった若者について、話を聴きとったうえで現場と調整し、青少年活動センターへつないだケースが2件あった。

(4) アドボカシー

- 京都市はぐくみ推進審議会等の「若者の声をいかにきくか」を検討する場面で、アンケートやワークショップもいいが、それ以外の日常の中でいかにに関わり、声をきくのか、問題提起した。また「子ども・若者の声を聴く」京都市の取組にも協力し、主に青少年活動センターでの実践を発信した。

5. ユースサービスの普及

(1) ユースワーカー養成事業

① ユースワーカー養成講習会・継続研修

- ユースワーカー養成講習会を9/6・7に実施した。
- 講習会のフォローアップを目的に、11/18に継続研修を実施。
- 今年度は講習会と継続研修をセットで申込・受付を実施したことから、継続研修への参加が伸びた。

② ユースワーカー協議会(全国各地のユースワーカーで構成)の事務局運営と参画、基盤強化

他都市のユースワーク実践団体とともにユースワーカー同士が学び合うコミュニティを運営した。

- 7/13に総会とあわせて、「ユースワークが必須の社会インフラとして確立されるためには？」をテーマにしたフォーラムを世田谷区希望丘青少年交流センター「アップス」にて対面・オンラインのハイブリッドで開催した。
- すそ野を広げることを目的に実践交流・会員交流の取組を見直し、「会員ぶっちゃけトークの会」を実施、会員からの意見をきく機会を持った。そこから「地方×ユースワーク」「若手×ユースワーク」の取組を開始した。
- ユースワーカー養成講習会を8か所(郡山・品川・横浜・名古屋・金沢・京都・神戸・呉)で実施。
また、京都・金沢では講習会参加者を対象にした継続研修を実施した。
- マネージャー研修を実施。初回でマネージャー層の困り感を出し合い、それをもとに3回の勉強会を実施した。
- 12月より月1回、会員対象の「事例検討会」を実施した。
- その他、研修派遣、調査研究等の取組に協力。

(2) インターン・実習の受入れと調整

各大学等からの依頼に応じ、インターン・実習生の受入を行うとともに、協会独自インターンを募集・受入。

(職業体験)

- 大学コンソーシアム京都 2名(南・学習支援・学校連携)

(社会教育実習)

- 佛教大学 2名(下京・学校連携)※内 1 名途中辞退
- 大谷大学 2名(下京・事務局)
- 龍谷大学 2名(中央・東山・事務局)※内 1 名単位認定なし
- 京都女子大学 1名(南)

(社会福祉実習)

- 同志社大学 1名(山科・南・学校連携)
- 大谷大学 2名(南・山科・ケア支援・学校連携)

(ボランティア実習)

- 京都産業大学ボランティア実習 18名(北・東山・山科・下京・南・伏見・学校連携)

(協会独自)

- 各大学等からの依頼に応じインターン・実習生の受入を行うとともに、協会独自インターンを募集・受入。
- 有償インターン3名(事務局(学校連携 1名、社会的養護自立支援 1名、夏休み学習会 1名))
- 学習型インターン2名(学習支援、学校連携)

(3) 調査・研究事業

① 立命館大学との共同研究

- ユースワーカー養成研究会
ユースワーカー養成プログラムを振り返り、ユースワーカーの定義化と修了生調査に取り組んだ。
- ユースワーカー養成プログラム
受講生1名のみ。実習の希望なく、実習に関連する2科目が閉講となった。また、今期2名が修了した。
- 学部レベルでのユースワークの可能性模索
 - * 産業社会学部「キャリア形成特殊講義」を担当。受講少数のため閉講となった。
 - * 産業社会学部「ソーシャルデザイン・スタディーズ入門」の授業に協力。ゲスト講師として協会の取組や若者に関わる社会課題について説明、青少年活動センターを使った企画実施に協力した。

②外部機関・団体・研究者等との共同研究

○「子ども・若者支援専門職養成研究所」への協力

奈良教育大学生田教授を代表とする科研「子ども・若者支援従事者の専門性構築の課題と展望―「支援の重層性」の視点から―」（4年目／4年）に参画。若者領域部分で、ユースワークの類型化に向け、主に地方のユースセンターや社会教育との関連について調査を実施した。

また、2月にはドイツの研究者を招聘し、東京・京都・奈良でラウンドテーブルを実施。京都では中央青少年活動センターにて実施し、関係者を交えて協議を行った。

○「若者支援とユースワーク研究会」への協力

法政大学平塚教授を代表とする科研「若者支援/Youth Work / Informal教育のCore Values共有化の方法をめぐる国際共同研究」（2年目／4年）に参画。定例研究会のほか6月にイギリスからユースワーカーを招聘して「ストーリーテリングワークショップ」を札幌、関東、京都で実施した。京都でのワークショップには若手職員が参加するなど組織内での取組も広がった。

(4)戦略的な広報の取組

①協会及びユースサービスの「ファンを増やす」ための戦略的な広報に取り組む

○団体ページと指定管理業務ページ等を切り分けたサイト運営を行った。

②広報の全体調整

○広報データの更新・管理、協会広報物の全体調整、広報関連の照会・回答等、全体の調整を行った。

③協会・ユースサービスの発信

○「おたえる（協会広報キャラクター）」を用いたX（旧Twitter）、Instagramで協会の取組や各事業所の事業について広報を行った。また、月1回各事業所からのSDGsの取組も発信した。

○PR TIMESの非営利団体サポートプロジェクトを活用し、積極的なプレスリリースの配信を行った。

④講師派遣事業

○外部機関・施設等からの依頼に応じて、企画提供や講師派遣を68件行った（令和6年度：67件）。

○昨年度多数あったおりおりのいえへの視察は少し落ち着いたが、ユースワーク・ユースセンターへの関心の高まりもあり、本年度も昨年度並み77件の視察受入があった。（令和6年度年度76件）。

○講師派遣や視察対応を担う人を増やし、多様なニーズに対応できるよう検討している。

6. 持続可能な組織づくり

(1)ディーセントな組織づくり

①メンター制度

新規採用職員4名、新任チーフ1名に対し、ユースワーカーとしての業務を行う上で抱える葛藤や直面する課題、迷い等を相談できる体制を整えた。

②コンサルテーション・スーパービジョン

大阪成蹊大学 山本智也教授に依頼し計11回実施。

本年度は全回リモートで実施した。

(2)SDGsに沿った事業・組織運営／環境負荷の少ない団体・施設運営

○事業評価、事業プランとSDGs17目標の紐づけ、および各事業所が輪番で外部発信をする「今月のYS×SDGsな取組」も定着してきた（月1回発信）。

○KES（京都 環境マネジメントシステム・スタンダード）ステップ1認証を維持した。

○KESの取組年度を会計年度としたことで処理の効率化に、各所属実行責任者（所属長）に依る3ヶ月毎評価コメントにより、各事業所の取組チェック管理の意識向上に繋がった。

○環境改善目標について協会全体として達成した。

*環境意識の充実と外部発信（毎月1回）／センター周辺の清掃（毎月1回）

*環境啓発事業の実施（全事業所年間で6回）

(3)職員研修の構造的な運営

年間研修計画の設定と、それに基づいた研修を実施した。

- 新規採用職員研修の実施。／対象4名
- 若手(2～4年目)職員研修。集合型とグループ活動型(2グループそれぞれ課題設定)で実施。／対象10名
- ポスト若手研修(4～5年目)。他事業所の取組に参加し、理解を深める場を設定した。／対象6名
- 所属長・チーフ研修。昨年度に引き続き、「マネジメント」について動画視聴型で学ぶ機会を2回設定した。
- 外部研修の希望を集約し、研修の機会を提供。費用の一部を助成した。
- 全体研修を2回実施。7/23は午前には普通救命講習、午後は合同会社カーニバルライフ・山下氏をファシリテーターに迎え、互いの価値観を知り合うワークを行った。11/20は、前半に「協会の各事業の共有」をした後、後半は「地域資源の掘り起こし」「若者の意見反映」の2つのテーマに分かれて意見を出し合った。
- 実践をふりかえること、ワーカーの語りに耳を傾けることを前提とした事例研究会を5～2月に実施した。

(4)事業の計画・評価の仕組みづくり

- 事業計画・評価・報告の流れを整理し、意味を明確化するとともに、あり方を捉え直すプロセスを継続した。
- 今年度より評価のフォームを変更し、ロジックモデルの作成や評価時にエピソードの記載もできるようにした。
- 事業評価ヒアリングでは、ロジックモデルに基づく評価と、Principle(協会として大切にしたいこと)に基づく評価を実施し、両面から事業や事業項目を見直す機会を持った。
- さらに、Principleの見直しに取り組み、チーフ会にて内容の確認、意見交換を行うとともに、各事業所での意見も取りまとめ、タスクチームで検討のうえ改訂した。

(5)その他のプロジェクト

- 実施なし

<行事一覧>

事業名	実施期間	回数	参加者(のべ数)	備考／実施場所等
学校連携事業(憩いの場)	月3-4回金曜	30	146(1, 108)	京都奏和高校
学校連携事業(Quintetto)	月2-3回木曜	24	162(1, 090)	京都奏和高校
ゆうすぺーすやましな	毎週月曜・金曜	85	96(338) Vo5	山科区役所 第5会議室
いろはのなかまたち	毎月第2土曜	12	15(52)	中央センターほか
おりおりのいえ2周年活動報告会	11/22	1	45	京都経済センター／中央センター
春のたき火旅	2/28～3/1	1	14	宇多野ユースホステル
ユースワーカー養成講習会	9/6-7	1	17	中央センター
ユースワーカー養成 継続研修	11/9	1	11	中央センター

Ⅱ. 青少年活動センター指定管理業務

1. 協同事業

7センターが協同し、1センターでは実現しにくい事業（規模感・費用面・運営面）に取り組んだ。

(1) 若者文化発信事業「ユスカル！」【後掲 東山センターに記載】

(2) 青少年交流促進・多世代交流事業「ユースシンポジウム」【後掲 北センターに記載】

2. 横断的事業

7センター共通もしくは1センター単位ではない項目について、横断的に取り組んだ。

(1) 関係者(利用グループ・関係団体・関係個人等)との関係づくり・情報発信

○グループ登録の運用と調整

＊青少年グループ登録＝112団体(前年度113件)、育成登録団体108団体(前年度106件)

○団体の交流・情報交換の場づくり

＊若者に関わる団体や青少年自主活動グループの交流・情報交換会を2月23日に実施した。

＊また、その中で「生成AIの活用方法と他団体との交流」をテーマに研修を実施した。

(2) ボランティア情報発信・育成・研修会等の実施

○ボランティア説明の実施とマッチング

＊5月25日に全青少年活動センター合同のボランティア説明会を実施した。

＊その他、随時ボランティアを募集し、応募に関する個別対応を行った。

○中学生学習支援ボランティア説明会・研修会を実施した【後掲】

(3) 青少年活動センターの利用・稼働率促進に関する取組

○利用・稼働促進に向けた広報に取り組んだ。

○ユースアクションイベントガイドのWEBサイト更新による発信に取り組んだ。

○7センター合計として、2024年度から連続で年間利用者数50万人超えを維持している。

(4) 青少年活動センターの相談・支援連携に関する取組

○青少年活動センターにおける相談をとりまとめ、対応につなげるべく取り組んだ。相談件数は、1,254件、2,078回であり、前年度より増加した。

○センターを3つに分け、各々に連携担当をつけ、センターで受けている相談への情報共有や助言を行った。ケースによっては、ケア・支援連携室のワーカーがセンターに出向き、当該の利用者へ相談や情報提供を行うことを可能とした。実際に訪問をしたケースは2件あった。

○センターの相談記録に関して、共有やケース検討がしやすいツールを模索している。

(5) センター機能の持ち出し

全市域でユースサービスが展開され、青少年にとってアクセス可能なサービスとなるよう、既存事業の取組継続と、新たな機能の持ち出しを検討した。

① 機関連携

○センター設置地域及び担当区の区役所との連携(主に地域力推進室や子どもはぐくみ室)を進めた。

○各センターにおけるセンター機能の持ち出しの状況を所属長会にて共有した。

② 出張ユースワークの実施と整備

○資源の少ないエリアにおいて、居場所・活動・相談機能のいずれかを有した場づくりを行った。

＊ポップアップ型として向島、西京、山ノ内、醍醐エリア等での継続実施に加え、山ノ内2拠点目と左京区内にて新たな場を立ち上げた。

＊「YOUTH STAND」 移動型ユースセンターとして、キッチンカーを用いた若者との協同または若者による場づくりを行った。(年19回)

＊「おやつやSUN」 京都市立芸術大学内にて定例実施。他団体とのコラボレーションや相談機能も持ち合わせた大学内ユースセンターを企画して取り組んだ。

＊「ユースストリートカフェ」 市内若年支援団体等と連携しながら、夜間帯商業施設での声掛けと情報発信を行った。

③普及にかかる発信、協働

- 全市域でのユースサービスとしての若者の場の拡がりを可視化するため、MAPと幟を作成した。
- 地域でのステークホルダーとの協働や担い手育成に取り組むため、共通アイコンとしての名札のストラップ作成と、キーとなる各事業所の担当者が集い、現状や課題、成果等の共有を行う担当者会を行った(年2回)。

<行事一覧>

事業名	実施期間	回数	参加者(のべ数)	備考／実施場所等
ユスカル！	11/3	1	(2, 429) Vo11	ロームシアター京都
ユースシンポジウム	12/14	1	(131)	北センター
団体活動報告・交流会	2/23	1	13	中央センター
合同ボランティア説明会	5/25	1	11	中央センター
ボランティア研修	7・9・10・2月	4	(34)	中央センター
向島ユースセンター	5～3月	23	(160)	藤ノ木セカンドハウス117ほか
洛西CHOTTO	通年	24	(153)	京都市交流促進・まちづくりプラザ
右京ユースセンターin 山ノ内	通年	23	(83)	山ノ内自治会館
右京ユースセンターin MACHIKO	6～3月	28	(168)	右京区役所 MACHIKO
醍醐みらいユースセンター	通年	24	(109)	醍醐いきいき市民活動センター
Co.Co.ひろば	8～3月	12	(36)	左京西部ふれあいサロン
おやつやSUN	4～1月	16	(2, 550)	京都市立芸術大学
ユースストリートカフェ	2～3月	2	(160)	BiVi二条 / 連携事業

Ⅱ－１ 中央青少年活動センター

全体の動向

ロビープログラムを中心に、若者と出会う機会、若者同士が出会う機会を多く創出することを意識した。その結果、事業参加者数の増加や相談件数の増加につながり、若者にとって居心地のよい場づくりを進めることができた。

また中央センターのテーマである「社会参加促進」の実現を様々な方法で実施した。地域でのお祭りに若者が参加する、魅力度向上事業のため声集めのイベントを行う等、センターが持つ資源の活用をより反映させたプログラム展開を行った。

1. 青少年への総合相談窓口と社会参加の促進

①交流プログラム「CONTACT」

- センターを利用する青少年とつながりを作る「カフェ・ド・まんなか」を定例で行った。常連となる若者も多く、相談や他事業につながるきっかけとなった。
- コミュニケーションに苦手意識を持つ青少年のための登録制の交流プログラム「街中コミュニティ」を行った。
- 青少年の興味関心に沿った参加型の掲示プログラム「ロビー掲示」を随時行った他、セクシュアルヘルス事業に関連して、男女共同参画推進協会と「パープルリボン」コラボ企画を実施した。
- 第27回参議院議員選挙に合わせたロビー企画「ワン院選ワン吉」を事務局のシティズンシップ形成事業と共同で実施。また、魅力度向上事業の一環で若者からの声集めのためのプログラムを行い、その結果をロビーに掲示した。

②自主活動応援事業「CHEER」

- イベント開催やプログラム実施など、青少年グループや個人のやりたい思いを、若者とともに具現化した。不登校の経験を当事者の若者が語る会、コスプレが好きな若者によるコスプレ撮影イベント等、多岐にわたる企画をサポートした。
- コスプレイベントに関連した書籍を展示する「出張図書館」を、京都市中央図書館の協力を得て開催した。

③中央センター周辺地域の団体・機関との連携事業

- 中京区、及び担当区域である右京区について、関係会議に参加した。
- 中京区「はぐくみ」ネットワーク実行委員会主催「松原中学校ふれあいトーク」、「御池中学校ふれあいトーク」などへ参加した。
- 「右京区まちづくり大交流会」でブースを出展した。
- センター機能の持ち出しとして、山ノ内自治会館で月2回「右京ユースセンター in 山ノ内」、また右京区役所内のまちづくり交流拠点スペース MACHIKO で月3回「ユースセンター in MACHIKO」がスタートした。

④社会参加促進

- 協会本体事業と連携し、ユースカウンスル京都との協働を実施した。

2. 居場所づくり支援事業

①交流プログラム「CONTACT」(再掲)

3. 自主活動支援／担い手育成事業

①自主活動応援事業「CHEER」(再掲)

②インターン・実習生・職場体験等の受け入れ

- 2025年度の受け入れはなかった。

4. 地域交流・連携・参加事業

①中央センター周辺地域の団体・機関との連携事業(再掲)

②育成委員会の設置と運営

- 昨年度の事業報告並びに、今年度の事業計画、青少年委員の委嘱について、関係者と協議した。

5. 相談・支援事業

①相談事業

○前年度より32件増加。各事業や日々の関わりから、相談を拾い上げられる体制を意識した。

②寄り添い型継続支援事業(支援室との連携)

○支援室の専門性を生かし、寄り添い支援が必要な青少年を対象に支援室と協働して実施。

③就労支援事業(有償作業体験)

○今年度、実施なし。

④中3学習会「かけはし」「ひまわり」「れんげ」

○学生団体Apolon・花園大学・京都光華女子大学から協力を得て実施した。ボランティアを中心に学習者に合わせた学習サポート・関わりを継続し、安定して運営できた。

6. 利用促進・情報発信・広報事業

①自習室の運営

○空き施設を利用して自習室を設置した。一昨年度より利用人数、登録人数ともに増加した。

②トレーニングルームの運営

○5月8日から6月30日は館全体の工事のため閉室した。

○京都医健専門学校の実習先として学生2名を受入れ、実習終了後はアドバイザーとしてガイダンスを担当いただいた。また同時に日々のトレーニングルーム運営も安全に運営することができた。

③広報活動

○中京区・右京区内の中学校と関係機関へ各事業のチラシ配布を行った。

<行事一覧>

事業名	実施期間	回数	参加者(のべ数)	備考／実施場所等
社会参加促進	通年	—	(470)	定例の会議含む
交流プログラムCONTACT	通年(カフェは毎月第1土曜日、第3木曜日)	54	(1990)	掲示、交流、カフェ含む
交流プログラムCONTACT 街中コミュニティ	通年(毎月第2、第4月曜日)	20	(48)	
自主活動応援事業「CHEER」	随時	—	(160)	
育成委員会の開催	7/3	1	10	
寄り添い型継続支援事業	通年	296	4(296)	
中京学習会「かけはし」	通年(毎週金曜日)	51	619	
右京南部学習会「れんげ」	通年(毎週月曜日)	43	244	
右京学習会「ひまわり」	通年(毎週木曜日)	51	614	2025年度より引継ぎ
自習室の運営	通年	500	(1952)	
トレーニングルームの運営	通年	11	(61)	

Ⅱ-2 北青少年活動センター

全体の動向

施設利用者数は、延べ44,519名(前年度比で2,482名増)。前年度に続き、自習室を利用する中高生の増加とともに、ロビー利用者も増加した。ロビーにソファを置いて、靴を脱ぎくつろげる空間を設置したことで、ロビーでリラックスして過ごす若者も増えた。事業面では、一昨年度から輪番制となった「ユースシンポジウム」事業の主幹を担い、テーマ決定から事前アンケート、関係機関との連携、当日運営、報告書作成までを年間通じて取り組み、地域や関係機関との繋がりがより深まった1年となった。

1. 地域(自然、環境、生活、文化)と関わり、自身のライフスタイルを考える(くらしびらき)

①若者農業体験隊「米comeCLUB」

○農業や自然、環境に興味関心の高い若者の参加が多く、積極的に講師に質問する姿が見られた。農業体験を通じて、若者が自身の生活や暮らしを振り返る機会となった。

②気軽に休日ボランティア

○地域イベントやお祭りでのブース運営を中心に、若者が気軽にボランティア活動をすることができる機会をつくった。楽しみながら参加することができるため、参加者の満足度は高かった。

③地域体験プロジェクト

○伝統工芸体験や商店街歩き、林業体験といった多様なライフスタイルを知るプログラムを実施。地域の方々と若者、参加した若者同士の交流もすすめることができた。

2. 居場所づくり支援事業

①ロビープログラム

○センター利用者が気軽に参加できるプログラム(ハロウィン、七夕企画など)を実施した。
○掲示企画では、若者が自身の思いや意見を表明したり、他者の価値観を知ったりする機会になった。
また、「ロビー改造計画」での意見をもとに、居心地がよいと感じられるようなロビー空間をつくった。

②20代の居場所づくり「ごぶさた」

○半数が新規登録の参加者で参加率も高く、参加者同士でのコミュニケーションが活発に行われる場になった。

③食を通じた居場所づくり

○大学生年代対象の『ご飯のおとも』では、孤食傾向にある若者のニーズは高かったものの、最少催行人数に満たないため中止をした回もあった。また地域ボランティアと協働実施した『おぼちゃん食堂』(中学生～30歳の青少年対象)は、毎回20名を超え人気だった。

3. 自主活動支援／担い手育成事業

①自主活動応援事業「ねこのて」

○青少年からの企画に関する相談が複数あり、ロビー企画やキッチンカーでの活動に至った。センターが、若者の活動サポートをする場であることを認識してもらう機会となった。

②インターンシップや実習などの受け入れ

○学習支援事業にて実習生を受け入れ、実習期間終了後も継続してボランティアとして活動することとなった。

③ボランティア育成事業

○各事業で振り返りを行い、ボランティアの気づきや学びにつながるようなフィードバックを行った。

4. 地域交流・連携・参加事業

①関係機関との連携・協力

○運営協力会総会を開催(7月)。
○はぐくみネットワーク(北・上京区)、北区行政推進会議、北区要保護児童対策地域協議会代表者会議、北区子育て支援推進会議他に参加協力した。
○「北区民ふれあい祭り」が雨天で中止となった代わりに、当センターも会場として実施された「北区つながるまちフェスタ」(11月24日開催)にて、ボランティア募集やステージ発表団体呼びかけ等協力し、若者と地域が繋がる機会となった。
○京都府立清明高等学校の運営協議会の委員となったことで、センター事業や広報面での協力関係が進んだ。

5. 相談・支援事業

①相談・情報提供事業

○継続相談が増え、日常的に相談ができる青少年との関係性が築けている。他機関(特定非営利活動法人自殺対策支援センターライフリンク他)からのリファーもあり、個別対応等の依頼も増えてきた。

②中学生学習会(学習支援事業)北・上京中学生学習会

○学習者にとって、それぞれのペースで過ごすことができるような場づくりを意識して実施したことで、学習者からの学校や家庭、健康についてなどの個別相談も多かった。

○下半期には、火曜日に北・上京中学生合同学習会を実施した。

③就労支援事業「職場体験」(京都若者サポートステーションと連携事業)

○京都若者サポートステーション事業サウナワーク(サボステウキウキナカヨシワーク)の一環として、料理室の棚整理やオープン清掃等の軽作業体験の機会をつくった。

6. 利用促進・情報発信・広報事業

①自習室

○新規登録者が983名となり、年々増加傾向。利用者との関係づくりのきっかけづくりとして、スタンプカードを用いて、他の事業への参加や継続的な相談に繋がるなど、利用促進事業としての機能を果たした。

②卓球フリータイム

○一定数の利用があるため、卓球ができる機会、場所のニーズの高さが伺える。他事業への参加には繋がっていないことから、情報提供を行うための工夫を検討していく。

③広報充実事業

○周辺大学でのボランティア説明会や授業等に出向き、協会およびセンターのPRを実施した。また、コミュニティラジオへの出演や、北区役所中心で実施されたシンポジウム「北区コレカラ」へのパネリスト参加等を通じて、地域住民への周知活動を実施した。

7. 少年非行の解決・軽減に向けた協力事業

①ユース・アシストへの協力

○京都府健康福祉部家庭・青少年支援課「立ち直り支援チーム(ユース・アシスト)」が実施している「非行少年等の立ち直り支援事業」に協力した。

○家庭裁判所に送致・係属中の若者を対象にし、月1回の地域清掃活動や切手整理活動を行った。

<行事一覧>

事業名	実施期間	回数	参加者(のべ数)	備考／実施場所等
若者農業体験隊「米 come CLUB」	4～10月(7、8月除く)	4	(20)	左京区大原
気軽に休日ボランティア地域の祭り	随時	7	(20)	新大宮商店街、紫野小学校ほか
気軽に休日ボランティア清掃活動	随時	1	(2)	北大路通沿い
地域体験プロジェクト	通年	4	10(10)	西陣織会館、出町桝形商店街、雲ヶ畑地域
ロビープログラム	通年	8	(323)	
20代の居場所づくり「ごぶさた」	通年(第2土曜日)	12	10(77) Vo. 3(16)	船岡山公園、マンガミュージアムほか
食を通じた居場所づくり ご飯のおとも	5～2月(第3火曜日)	10	(35)	
食を通じた居場所づくり おばちゃん食堂	通年(月1回)	12	(425)Vo.含む Vo. 13	
自習室	通年(毎日)	308	登録983 (8236)	
卓球フリータイム	毎月9のつく日	30	(263)	
北中学生学習会	通年(毎週木曜日) ※11月より火曜日にも実施	69	18(245) Vo. 17(158)	
上京中学生学習会	通年(毎週月曜日)	40	14(76) Vo. 8(156)	上京区内
ユースシンポジウム2025	12/14	1	(131)	府立清明高校ほか

Ⅱ-3 東山青少年活動センター

全体の動向

センター利用者に関しては、全体として昨年度比-5,614名であった。事業参加者数は減少したが、施設利用者数は+785名、その内青少年グループの利用は+2,864名と増加した。特に、小学生の頃からセンターに慣れ親しんできた地域の中学生を含め、中高生がロビーや部屋を使いによく訪れ、賑わっていた。左京区では新たな場づくり・連携も始まり、ターゲット層のニーズ把握が課題として見えてきた1年であった。

1. ものづくりと創造表現事業

<創造表現事業>

①演劇ビギナーズユニット(京都舞台芸術協会との共催事業)

○演劇初心者を対象とした事業。ワークショップを通して、演劇の楽しさに触れつつ作品創作に必要な姿勢を学び、稽古を経て修了公演を行った。参加者が、個人として・グループとしての課題と向き合い乗り越える経験を通して、達成感を得て成長できるような場となっていた。

②ダンススタディーズ2

○創作ダンス(コンテンポラリーダンス)のワークショップと修了公演を行った。創作や身体を使った自己表現に関心のある大学生年代の青少年が参加し、ダンサーの青少年ナビゲーターとともに創作に挑戦した。「印象に残っている出来事」を共有し合い、それをもとに作品を創る中で、自分自身を見つめ他者との在り方を考えられる機会となっていた。

<知的な障がいのある若者の表現事業>

①東山アートスペース

○アートを通して各々表現したいことを形にできる場となっていた。外部の作品展に積極的に出展し、また、年2回「からだではなそう」との合同イベントも開催した。年度末には保護者会を開き、あらためて思いを聞ける場となった。

②からだではなそう～表現活動へのお誘い～

○新規・年度途中からの参加者も、参加経験のある青少年とともに、自由にリラックスして自己表現できる場となっていた。ボランティアは「創作表現活動ボランティア」として、「東山アートスペース」と横断して活動できる形に変更し、両活動への参加を通して異なる気づきが得られていた。

<若者文化発信事業>

①ステージサポートプラン

○自主公演・発表経験のない青少年グループや経験はあるが、実験的なことをしてみたいといった応募が寄せられた。企画の進め方やテクニカル面でのサポート等に関する相談も多く、各グループの状況に合わせた対応を行った。

○創活番(創造活動室ボランティア)

学校連携において、京都市中学校教育研究会演劇部会や京都府高等学校演劇連盟中部支部に所属する生徒に対し、講習会の実施や合同公演のリハーサル・公演サポートを創造活動室のボランティアチーム「創活番」が担い、青少年の主体的な活動の場が提供できた。

②「未来のわたし?劇場の仕事?」(ロームシアター京都との連携事業)

○ロームシアター京都での自主事業における仕事体験を通して、劇場の仕事や「働くこと」について触れられる機会を提供した。高校生年代から社会人まで参加があり、意欲的に取り組んでいた。

③センター協同事業(若者文化発信事業)ユスカル!(若者文化市)

○京都市・ロームシアター京都との共催で実施した。当日は雨天対応もあったが、スタッフだけでなく出演・出店者も共に対応に当たる姿が見られた。また、「未来のわたし」参加者がボランティアとして参画し、来場者が楽しめる仕掛けを企画・実施した。

2. 居場所づくり支援事業

①利用促進事業【6-②再掲】

○6-②「利用促進事業」と居場所づくり支援を重ねて実施した。

3. 自主活動支援／担い手育成事業

①創作活動支援事業

○舞台公演やライブ等を控えた青少年グループを対象に、本番に向けた練習場所の提供や相談対応を行った。演劇ユニットやダンサーの他、バンドもリピーターが多かった。延べ57グループ(昨年度比1グループ増)の利用があった。

②センター事業における各ボランティアの育成と支援

○ボランティア活動希望者のニーズに合った活動へ繋げ、各活動の終わりと年度末には振り返りを行った。また3つの大学から実習生を受け入れ、知的な障がいのある若者の表現事業をはじめ、青少年に向けた場の存在を知り体感してもらえる機会となった。

4. 地域交流・連携・参加事業

①地域交流・連携プログラム

○東山区では、はぐみネットワーク実行委員会への参画の他、区役所との連携や区内ホテル主催子ども食堂への協力等を行った。左京区への新たなアウトリーチとしては、身体を使ったワークショップやものづくりを通してゆったり過ごせる場「Co. Co.ひろば」(左京西部いきいき市民活動センターとの共催)の開催や、京都市障害者スポーツセンターでのキッチンカー出店等があった。

②運営協力会の運営と連携

○運営委員とは、演劇ビギナーズユニットや青少年からの相談対応、アウトリーチに関する意見交換を行った。

5. 相談・支援事業

①相談・情報提供事業

○事業参加を通して築いた関係性をもとに、参加する中での悩みからそれ以外の自分自身に関する事柄まで相談があった。また、関係機関からの相談も増えている。

②東山・左京中学生学習会の運営

○東山学習会では中学卒業後も継続して参加があり、またセンターロビーの日常的な利用もある等、安心できる場となっている。左京学習会は、コーディネーターを中心にボランティアが自主的に動く雰囲気作られ、学習者も毎回多く参加があった。

③就労支援事業(サポステとの連携事業)じぶんみがきダンス

○就労に向けた、自分を表現する経験・他者とのコミュニケーションの経験の場として、ダンス創作のプログラムを実施した。参加者は楽しさや達成感を感じつつ、それぞれが自分と向き合える時間となっていた。

6. 利用促進・情報発信・広報事業

①情報発信および広報活動の充実

○HPやSNS、チラシ等でのセンター・事業広報や、青少年が参加できるロビーでの掲示企画を行った。特に新設したInstagramの更新に力を入れ、実際にそこから事業参加に至ったケースもあった。

②利用促進事業

○自習室・焼成窯の開放や、陶芸ワークショップ、中高生対象の演劇ワークショップを実施し、他の施設利用や別事業への参加にも繋がった。

<行事一覧>

事業名	実施期間	回数	参加者(のべ数)	備考／実施場所等
演劇ビギナーズユニット	5～9月	105	17(1,690)	自主練習・公演入場者含む
ダンススタディーズ2	11～3月	51	7(385)	自主練習・公演入場者含む
東山アートスペース	5～2月	16	45(191) Vo.15(37)	
からだではなそう	5～2月	14	17(83) Vo.15(23)	
アートスペースからだではなそう合同回	1/18、3/8	2	32 Vo.5	
ステージサポートプラン	通年	12	1,585 Vo.9(86)	
未来のわたし-劇場の仕事-	年1回(7・8月)	12	12(102)	ロームシアター京都
センター協同事業「ユスカル！」	11/3	1	3,104 Vo.8(68)	ロームシアター京都
創作活動支援事業	通年	57	1,740	
地域連携・交流事業「Co.Co.ひろば」	8～3月(月1～2回)	12	(36)	左京西部ふれあいサロン
中学生学習支援事業(東山)	通年(週1回)	50	12(140) Vo.12(144)	
中学生学習支援事業(左京)	通年(週1回)	49	22(495) Vo.22(280)	
じぶんみがきダンス	年2回(10～11月、1～2月)	10	15(42)	
利用促進事業(工作室ワークショップ)	2～3月	3	5(13)	
利用促進事業(演劇ワークショップ)	3月	5	25(43)	
自習室	通年	306	323	
焼成窯一般開放	通年(月1回)	12	188	
ロビーギャラリー	通年	306	16,316	

Ⅱ-4 山科青少年活動センター

全体の動向

全体利用者数は延べ55,747名、前年比+302名増加した。昨年度まで利用していた育成団体が会場の大きさや利用最大時間の関係で、別の場所を利用し大きく減少した(-973名)が、新中学1年生や新高校1年生が継続的にセンターを利用する姿が見られ(青少年個人A +1,005名/青少年G・A +1,375名)、「食」に関する事業への参加に繋がった(+84名)。昨年度12月から実施に協力している「ゆうすぺーすやましな」は、下半期毎回安定した利用があり(計418名)、相談を受ける関係になってきている。

1. 地域での交流・連携・参加をすすめ、青少年の育ちを支える機会や場づくりを行う

①地域通貨「べる」(自主)

- 「べる」について「知りたい」「協力したい」という問合せが多く、べるパートナーが4件増加した。
- 地域からお手伝いを求める声が増えた一方で、声かけがあまりできず、青少年の参加が少なかった。

②やませいフェスタ

- 「ぐるっとふれ愛まちフェスタ in 山科」の実行委員として連携、協力実施した。
- べるパートナーや関係団体、「やませい食堂」の協力のもと、模擬店や体験ブースを運営した。
- 日頃、利用している青少年だけでなく、多くの地域の方々が来場したことで、ボランティアにとって多様な人と出会う機会となった。

③運営協力会の運営と連携

- 総会を対面で実施した(6月)。
- 青少年と委員との懇談・意見交換会を実施した(2月)。

④地域との共催・協力事業

- はぐくみネットワーク会議など、地域への参加を通して、青少年支援に対する理解や認知を広め、地域で青少年を育む基盤づくりを努めた。
- 「食」をテーマとした地域での居場所づくりネットワーク「まちのちゃぶ台ネットワーク山科」の事務局を担った。青少年・子ども支援に関わる地域の方同士が、新たに出会い繋がるための「場」づくりとなる「大人カフェ」を2回実施した。
- 地域の方からの寄付金を原資とした助成金事業を、昨年度に引き続き運営した。

⑤やましな未来プログラム(地域での1日ボランティア活動)

- 受入先の地域の方から「また来てもらいたい」という声が多くあった。しかしながら、若者への声かけが充分にできず、昨年度よりも参加が少なかった。

⑥ゆうすぺーすやましなの運営協力(自主)【協会本体事業 2-(2)】

- 山科区役所庁舎を活用した山科南部エリアにおける中高生世代の居場所の実施に協力した。1年間継続的にオープンできたことで、継続的な利用もあり、個別相談を聞く機会も生まれた。

2. 居場所づくりを支援事業

①余暇充実事業

- センターを利用する青少年の声を聞く機会として、ロビー掲示企画を定期的に行った。
- ロビープログラムボランティアとともに、Yico を毎月第2・4土曜日に実施した。

②「食」に関する事業

- やませいカフェ(やませい食堂実施日を除く火曜日)軽食(100円/べる)を提供し、ゆっくり食べられ、過ごせる場を作った。
- やませい食堂(毎月最終火曜日)青少年ボランティアとともに夕食(200円/べる)を提供した。
- 「泉ハッピー食堂」とコラボカフェを実施。今年度は、メキシコからの留学生がカフェを運営する機会となった。

3. 自主活動支援/担い手育成事業

①自主活動支援事業

- 新たな青少年グループから自主活動に関する相談を受けた(1件)。
- 青少年ボランティアグループによる青少年の余暇プログラムを毎月第3日曜日に実施した。
- 生理用品の配布やデートDVに関する啓発など、青少年グループによるSHプログラムを実施した(2件)。

②担い手育成事業

- 各事業にて、ボランティアの受入れを随時行なった。
- 京都橘大学文学部キャリアゼミボランティアコースの他、大谷大学、京都産業大学など様々な大学から実習生を受け入れた。
- チャレンジ体験(音羽中学校)の依頼があり、受け入れた(3名)。

4. 相談・支援事業

①情報提供・相談

○継続して関わっている青少年については、学校や子どもはぐくみ室、関係機関と会議で共有をし、連携協力をしながら個別対応を進めた。

②中学生学習支援事業

○対象となる中高生を受け入れ、進学に向けたサポートや、日々の学習に対するサポートをボランティアと行った。

③サポステ連携事業「働く前のコミュニケーションワーク」

○ストレッチや発声練習など、演劇の手法を用いたコミュニケーションワークを実施した。

5. 利用促進・情報発信・広報事業

①広報事業

○中学校長会山科醍醐支部に依頼し、山科区内の新中学1年生にセンターの広報物(リーフレット等)を配布した。
やませいだよりは、定期的に発行(計4回)し、各教室への定期的な掲示を依頼した。

○SNSの活用については、Xやnote、ホームページ、Facebook、LINE@等を定期的に更新し発信した。
特に、ボランティア募集サイトActivoを活用したことで、ボランティアや参加者増に繋がった。

②施設利用促進事業

○空き部屋を自習室として開放。

○日祝日及び長期学休期間中、中高生がスポーツルームを利用できる「中高生タイム」を設けた。

○卓球フリータイムやバレンタインウィーク(料理室利用)も実施した。

6. 少年非行の解決・軽減に向けた協力事業

①ユース・アシスト(京都府「立ち直り支援チーム」)との連携

○今年度は、特に利用が無かった。

<行事一覧>

事業名	実施期間	回数	参加者(のべ数)	備考/実施場所等
地域通貨「べる」(自主) とびだせ! べる活	通年 随時	— 9	(197) (22)	
やませいフェスタ	11/2	1	1, 667 Vo(23)	「ぐるっとふれ愛まちフェスタ in 山科」と同日開催
まちのちゃぶ台ネットワーク山科 大人カフェ	随時 11/15、2/28	— 2	(43) (56)	
ロビー掲示	随時	13	(607)	
Yico	毎月第2・4土曜日	29	(182) Vo(45)	
やませいカフェ	毎週火曜日 ただし最終週は休み	36	(571) Vo(9)	
やませい食堂	毎月最終火曜日	12	(290) Vo(66)	
やましな未来プログラム	5/25、10/26、11/23、12/20	4	(559)	
自主活動支援事業 ボランティアサークル「ハビタット」 その他	毎月第3日曜日 随時	12 3	(244) (46)	
中学生学習支援事業	毎週金曜日	49	(198) Vo(111)	
働く前のコミュニケーションワーク	9/5、9、12、16	4	(23)	
自習室	通年	—	(3, 520)	
中高生タイム	日曜日祝日、長期休暇	—	(288)	
卓球フリータイム	毎月第2・4土曜日を除く毎日	—	(1, 848)	
バレンタインウィーク	2/12~14	3	(18)	

Ⅱ-5 下京青少年活動センター

全体の動向

全体利用者数は、延べ98,078名(前年度10,8647名)となった。協力事業として位置づけていた「Sリーグ」が独立したことで事業参加者数が減少したこと、大規模なグループ利用の減少が要因と考えられる。一方で、施設稼働率は高くなっており、小規模なグループの活動拠点となったことが伺えた。日常的な利用の中で育まれた関係性を基盤に、ボランティア活動や自主企画、地域連携事業への参加へと段階的に関わりが広がった。特に、若者が「参加する側」から「担い手」へと移行するプロセスが多く見られ、社会参画を支える拠点としての機能が表れた。

1. スポーツ・レクリエーション事業

①レクリエーション集団「よきDELI」

- 地域イベント「祭り・ザ・seisen」への協力依頼に応え、実行委員会への参画も含めた関わりを持つことができた。これにより、若者が地域の担い手として関係性を築く機会となった。
- イベントごとに担当制を導入することで、ボランティア一人ひとりの主体性や責任感が高まり、達成感の獲得につながった。

②ロビー交流企画【2-① 記載】

2. 居場所づくりを支援事業

①ロビー交流企画

- アンケート企画等を毎月2～4件実施し、気軽な参加機会を通じて利用者同士やワーカーとの関係形成を促進した。
- 日常的な関わりの中から相談につながるケースも見られた。

②おやつやSUN

- 京都市立芸術大学内での「YOUTH STAND」を月2回出店し、学生が自由に立ち寄れる居場所を提供した。
- 飲食提供に加え、支援機関との連携による相談機能(ユース保健室等)を組み合わせることで、生活・健康・性に関する相談につながるなど、複合的な支援の場として機能した。

③しもせいサークル

- 通信制高校4校と連携し、在籍生徒を対象とした交流プログラムを実施した。
- 外部コーディネーターと協働し、参加者のニーズに応じた多様なプログラムを展開することで、学校外での関係づくりの機会をつくることができた。

3. 自主活動支援／担い手育成事業

①プラン・ドゥ(自主活動促進の事業)

- 青少年の自主企画を9件支援した。
- 若者の関心を起点に、地域や行政との接点をつくることで、社会との関わりを実感できる機会となり、主体的な社会参画の促進につながった。

②ボランティアネットワーク

- 目標設定から振り返りまでのプロセスを共有することで、活動の意味づけや課題認識が深まり、団体間の相互理解や横のつながりの強化につながった。

③1Dayボランティア

- 清掃活動(第3土曜日)やプレイパーク(第4日曜日)、京都マラソンのスタッフ、お祭りやイベントスタッフなど幅広い活動の機会を提供した。
- 多様な体験機会を提供した結果、継続的な活動参加や自主企画への発展など、段階的な参画の広がりが見られた。

④インターンや社会教育実習などの職場体験の受け入れ

- 京都産業大学ボランティア実習生、佛教大学社会教育実習生を受け入れ、実習生の声を取り入れた事業運営を行った。

⑤レクリエーション集団「よきDELI」【1-① 記載】

4. 地域交流・連携・参加事業

①しもせいネット(協力・共催事業)

- 地域や行政からの依頼に応え、青少年が参加・参画できる機会の提供を行った。
- 下京区はぐくみネットワーク、学校運営協力会、行政推進会議、運営協力会など、関係機関・団体との連携・協力を図り、地域全体で青少年を支える基盤づくりを推進した。
- 洛西エリアにおいても、行政との連携により新たな関係構築が進んだ。

5. 相談・支援事業

①相談事業

- 日常利用の中での相談対応に加え、専門機関との連携による個別支援を実施した。
- 「何でも質問」に寄せられた相談に、回答するとともに、相談事業の周知に取り組んだ。

②中学生学習支援事業「下京学習会」

- 高校受験に向け、学習の習慣づけや学力の向上を目指し、週1回の学習会を運営した。
- 学校や家庭での悩みについて打ち明ける学習者もあり、居場所としての側面も見られた。

③中学生学習支援事業「らくさいスコーレ」

- 高校受験に向け、学習の習慣づけや学力の向上を目指し、週1回の学習会を運営した。
- 学習者とボランティアの交流イベントを企画し、学習者との関係づくりを行った。

④サポステ連携事業(アジプロ下京)【サポステ4ー③ 再掲】

- サポートステーションの登録者を対象に、受付・窓口業務などを体験する「アジプロ下京」を行った。
- 職場体験、ジョブトレの受け入れを行った。

6. 利用促進・情報発信・広報事業

①広報事業

- SNSやHPを通して、センターでの取組状況や、日常の様子を外部に発信した。
- 学生と協働した「KYOTO SHIMOSEI GUIDE BOOK」を2回発行し、若者視点を活かした広報を展開することができた。

②トレーニングルーム

- トレーニングルームの運営及びガイダンスを実施し、利用促進に取り組んだ。
- 高校生年代を対象に、平日の利用できる時間帯を限定した「筋トレ部」を実施した。

③自習室

- 自習室を毎日開放し、安定した利用があり、特に受験期には高い需要が見られた。
- 日常的な利用を通じて、進路や家庭等の相談、他事業への参加につながるなど、関係構築の基盤として機能した。

<行事一覧>

事業名	実施期間	回数	参加者(のべ数)	備考／実施場所等
レクリエーション集団「よきDELI」	通年、随時	33	(1, 869) Vo23	梅小路公園、菊浜グラウンドほか
おやつやSUN	4～7月、10～1月	16	(2, 556)	京都市立芸術大学 崇仁テラス
ロビー交流企画	通年	48	(3, 741)	
自習室	通年	—	422(2, 804)	
しもせいサークル	5～2月(月1回)	9	(96) Vo 2	すずなりランタンほか
プラン・ドゥ	通年、随時	12	(948) Vo 37	阪急嵐山公園、京都市役所前広場、河原町ガーデンほか
しもせいボランティアネットワーク	6月、3月	4	(36)	
1Dayボランティア	毎月第3土曜日、第4日曜日、随時	26	(308)	梅小路公園、七条商店街ほか
インターン受入	10月～3月	22	3(22)	
しもせいネット	通年、随時	110	(847)	
サポステ連携事業	随時	9	(43)	
相談事業	通年	79	(79)	
中学生学習支援「洛西スコーレ」	通年、毎週金曜日	52	(814) Vo15	洛西地域
中学生学習支援「下京学習会」	通年、毎週月曜日	42	(270) Vo13	
トレーニングルームガイダンス	毎月第1・第3木曜日	19	(103) Vo3	
筋トレ部	通年	—	13(172)	

Ⅱ-6 南青少年活動センター

全体の動向

全体利用者数は、延べ名50,584(前年度48,898名)となり、過去最高の利用者数を記録した。中高生年代の10代が安心して過ごせる居場所として、彼ら自身がセンター運営の一端を担うことをめざした「利用者会」を開催した。そこで出た意見を反映させた空間「南の広場」をロビーの一角に整備した。また、中学生が「参加する側」から担い手へと移行するなど、事業ごとに場への関わり方を分ける姿が見られるようになった。居場所づくりと担い手育成が連動し、そこに集う若者がユースワークの受け手にも担い手にもなれる場として機能した。

1. 10代の若者を中心とした居場所づくり事業（2. 居場所づくり支援事業を含む）

①ワカモノ食堂

ロビーにあるカフェカウンターを利用し、「食」をツールとした交流の場を提供した。

○ワカモノ食堂

毎週2回夕方及び日祝日などに簡単な軽食を提供した。青少年ボランティアが運営を担った。

○ひまわりカフェ

月2回、南地区更生保護女性会の皆さんがランチ定食を手作りし提供した。

助成金の積極的な活用やフードバンク京都、南区の農家、企業から食材の提供を受けた。

運営にあたり、複数の助成金を申請し、6件採択された。

②ロビープログラム

ロビー空間を中心に若者たちが自分らしく過ごせる、交流できる取組を実施した。

○ロビープログラム

一人でも友達と一緒にでも参加できるプログラムとして、たこ焼きパーティ、クラフト、花火大会、卓球大会などを実施した。

○センター利用者会 月に1回、センターの運営について話し合い意見を反映させる取り組みを実施、ロビーの空間に「南の広場」が誕生した。

③オープンデーロビープログラム

新中学1年生に向けて、センター利用体験日を4日間設けた。塔南の園児童館との連携もあり多くの参加があった。

④フリータイム&自習室

予約不要でセンターの施設を利用できる場を提供した。

⑤自主活動応援

5件の自主企画を支援した。若者の状況に応じて支援の度合いを変え、中学生喫茶やまちネコ調査では企画段階から伴走し、大学生の企画には場の提供と参加者コーディネートを行った。

3. 自主活動支援／担い手育成事業

①ボランティア育成事業

2拠点の学習支援、ワカモノ食堂を運営するボランティアの募集、育成を行った。

②インターンシップ・実習生・研究生の受け入れ

5名のインターン・実習生を受け入れた。

③一日ボランティア体験事業「ふらっとり」

気軽に参加できる1Dayボランティアとして、年4回の地域清掃、地域の祭りの運営、シニア向けスマホ講座などに参加した。

④支援者育成事業

子ども・若者支援に関わる人へ学びの場を提供し、若者支援者のネットワークづくりを行った。

○支援者セミナー(対面)

年間6回の連続講座として具体的なスキルアップの機会と、ネットワークづくりを行った。

○オンラインセミナー

年間3回(平日昼間)、テーマ別の講座をオンラインで実施し、平均100名の参加があった。

⑤自主活動応援【1-⑤ 再掲】

4. 地域交流・連携・参加事業

①地域協力・連携事業「南区・西京区ワカモノネットワーク」

○行政・地域団体における定例会議、研修会などに参加し、情報発信と共有を行った。

○区役所等からの依頼を受け、地域のお祭りや清掃活動に若者とともに参加した。

○桂川イオン近辺のパトロールへの同行は来年度から始めることとなった。

②洛西CHOTTO

京都市交流促進・まちづくりプラザにて毎月2回、中高生のためのフリースペースを運営した。ボランティア・コーディネーターと協力して夏祭りなど季節の行事を実施した。

5. 相談・支援事業

①センター相談事業

- おひるまユース 既存事業への参加が難しい若者4名と個別活動を実施した。
- 職員の力量形成のため研修への参加を促し、グループスーパービジョンができる環境を整えた。

②中学生学習支援事業

- 生活保護世帯などの学習環境が整わない中学生の学習支援とフードパントリーを実施した。
- 南学習会 学習者1名がワカモノ食堂ではボランティアとして役割を担った。
- 西京学習会 従来の会場から新規の会場に移転した。課題であったコーディネーターやボランティアの確保も進められた。

③社会的養護施設退所者等居場所事業「いこいーな」

- 施設退所者等の若者を対象に月に1度、晩御飯を食べながら自分の話ができる場を提供した。必要に応じて寄付食材の配布も行った。

④ピアサポート事業

- にじーず@京都
LGBTとそうかもしれないと思っている10代～23歳までの若者の居場所事業を、昨年度より実施回数を増やし毎月1回実施。運営は「にじーず京都」の協力を得た。参加者のなかには、活動日以外もセンターを利用している者もあり、センターの役割を果たせた。

⑤サポートステーションふれあい事業

- ハタプロ 南区にある農家さんの協力を得て、一日農業体験を行った。

6. 利用促進・情報発信・広報事業

①紙媒体による広報

- 南区内中学高校の生徒へ配布する「みなみだより」を年4回発行、地域回覧板の活用も行った。

②WEB／SNS活用事業

- Facebook、Xなど各種SNSを活用した広報を実施した。LINE構築研修を実施し効果的な運用を始めた。

<行事一覧>

事業名	実施期間	回数	参加者(のべ数)	備考／実施場所等
ワカモノ食堂「みなば」「ひまわりカフェ」	通年	187	(2, 936) Vo(60)	
ロビープログラム	通年	107	(1, 604)	
センター利用集会	毎月1回	11	(140)	
オープンデー	3月23日～27日	4	37(49)	
フリータイム&自習室	毎日	594	(5, 299)	
自主活動支援	4/21、7/10、12/11、 1/13、2/8	5	(86) Vo(19)	
インターンシップ・実習生受け入れ	通年、随時	40	5(40)	
ボランティア説明会・交流会	随時	8	(8)	
一日体験ボランティア「ふらっと」	6～3月	8	(26)	
中学生学習支援事業「南学習会」	毎週木曜日	50	5(195) Vo(75)	
中学生学習支援事業「西京学習会」	毎週金曜日	46	3(219) Vo(122)	西京区内
洛西CHOTTO	毎月第2・4土曜日	24	(81) Vo(47)	京都市交流促進・ まちづくりプラザ
サポステ連携事業 サウナワーク、ハタプロ	12/5、2/6	2	15	
いこいーな	毎月第3土曜日	12	6(36)	
にじーず京都(LGBTユースの居場所)	毎月第1日曜日	12	(125)	
おひるまユース	随時	30	(35)	
支援者セミナー	9～2月	6	(54)	打ち合わせ含む
オンラインセミナー	8/8、12/16、3/9	3	(324)	打ち合わせ含む

Ⅱ-7 伏見青少年活動センター

全体の動向

センター事業の参加者やボランティアが活躍できる場面として、「ふしみんオープンデイ」でのブース出展に取り組んだ。プログラム参加者(ゲスト)が自身の文化背景を生き活きと発信(ホスト)したり、ボランティアが自分の“好き”や“得意”を来場者とともに体験したり、日頃は異なるプログラムで活動するボランティアどうしが交流する機会となった。また、外国人人材を受け入れている企業担当者や、留学生を受け入れている大学教員の声を受け、下半期から月1回「外国人のためのスポーツデイ」を試行した。参加者がリピーターとなり、スポーツの機会へのニーズも実感した。

1. 若者が多文化に触れ、多文化について考える場をつくる

①にほんご教室

- 月3回、土曜日の午前中に実施。海外にルーツを持つ方に対して、青少年ボランティアが日本語を教えることを通して、多文化を理解する場となった。また、学習者・ボランティアの交流会を開催した。
- 以前より懸案だった順番待ちの解消のため、下半期からクール制を導入し、3か月ごとに受講生の入替えを図った。

②海外にルーツを持つ若者のサポート「Switch」

- 月3回、海外にルーツを持つ中高生年代の若者に対し、マンツーマンでの学習支援を実施した。(登録者5名)

③TABUNKAひろば

- ボランティアが中心となって、交流プログラムを企画した。
- リピーターが多く、交流を楽しむ様子が見られたのに加え、外国人参加者が母国に帰国する際には、さよならパーティーが開かれた。

④ふしみんオープンデイ

- 伏見区役所が行う“ふれあいプラザ”と同日に、国際理解を進める体験ブース等からなるイベントを行った。
- プログラム参加者がブース出展をしたり、異なる活動をするボランティア同士が交流できたりする機会となった。

2. 居場所づくり支援事業

①ロビープログラム・掲示

- 月替わりで、自分の意見や価値観を言語化・明確化したり、他者の意見・価値観に触れたりすることができる掲示板企画を実施した。

②自習室・フリータイム・ポイントカード

- 軽スポーツができる場として連日 15 時～18 時(土曜日 14 時～17 時)にスポーツルームAを、ダンスができる場として土・日・祝 15 時～18 時に中会議室ABを、バレンタインデーの時期に合わせて料理室を、それぞれフリータイムとして開放した。
- 自習室について、個人で自習ができるスペースと、友達同士でも利用できるスペースをそれぞれ用意した。
- センターの継続利用を促すツールとして、センターに来館するたびにポイントを付与し、獲得したポイント数に応じた特典を提供するポイントカード制度を継続実施した。

③外国人の若者のためのスポーツデイ【新規】

- 下半期、月1回、外国人の若者が気軽にスポーツを楽しめる機会を設けた。
- 留学生を受け入れている伏見区内の大学とも、関係を構築するきっかけとなった。

3. 自主活動支援／担い手育成事業

①自主活動支援

- かなえる喫茶:月に2回程度、「こども若者食堂からふる」OBと京都大学生によるこども若者食堂の運営サポートを行った。
- SORA Nail:ネイリストを目指す若者が、不定期ながらもセンター外のイベントにも積極的に出店した。
- ロビーを利用する高校生が「ビンゴ大会」を企画して、他の利用者とともに交流した。

②ボランティア育成

- にほんご教室、Switch、TABUNKAひろば、中学生学習支援事業にてボランティアを受け入れ、年2回ボランティア交流会を実施した。
- 半期毎にボランティアとの振り返りの場を設け、学びや気づきを言語化する機会を設けた。

③インターンシップの受け入れ

- 京都文教大学、京都産業大学、京都教育大学より学生を受け入れ、多文化共生事業や学習支援事業に携わった。

4. 地域交流・連携・参加事業

①地域連携事業

- はぐくみネットワーク、行政・地域団体などの取組に積極的に参加し、若者を巡る諸課題について提案や情報交換を行うとともに、連携できるネットワークを構築した。
- 社協ふれあいまつり、深草ふれあいプラザ、向島まつり、向島こっこりフェスティバル、kokoka オープンデイズに出展協力した。
- NPO法人お客様がいらっしゃいました。（生理用品回収ボックスの設置）、ピースメッセージ展（ロビーギャラリー）への協力を行った。
- 地域で活動する3団体と、それぞれ月1回ずつ、子ども若者食堂を開催した。（カフェおせつかい、ふるえカフェ、ユース食堂）

②アウトリーチ事業

- 月2回、向島ユースセンターの運営を行った。（向島地域での各種会議への参画、取り組みへの協力を含む）
- 久我・羽束師地域での居場所づくりに協力した。（夏休み学習会）

5. 相談・支援事業

①相談事業

- ワーカーによる相談・情報提供は79件158回。前年度比で－2件＋21回だった。
- ユースクリニックJapanと連携し、看護師・心理師による専門相談「ユースクリニック」を毎週木曜日に開設した。

②サポートステーション職業体験事業（アジプロ）

- 京都若者サポートステーションと連携し、「事務所体験」を1クール実施した。

③中学生学習支援事業

- 伏見学習会「STEP」毎週木曜日、「向島ぷらす」毎週土曜日、「深草町家学習会」毎週木曜日、「月曜学習会」1月～3月毎週月曜日を実施した。

6. 利用促進・情報発信・広報事業

①情報発信事業

- HPやSNS（X、Facebook）で、事業の様子をこまめに発信した。
- 大学（京都文教大）や高校（奏和高校）の授業で、協会及びセンターの取組を紹介した。

②利用促進事業

- 【再掲】自習室・フリータイム・ポイントカード

<行事一覧>

事業名	実施期間	回数	参加者(のべ数)	備考／実施場所等
多文化に触れるロビープログラム	通年	14	(1170)	
TABUNKA ひろば	通年(月2日曜)	49	30(144) Vo11(48)	
ふしみんオープンデイ	11/2	1	600(1539) Vo30	
にほんご教室	通年(月3回土曜)	38	17(143) Vo36(88)	
海外にルーツを持つ若者のサポート「Switch」	通年(月3回金曜)	32	5(58) Vo4(40)	
ボランティア育成	通年	11	94(106)	
インターンシップの受け入れ	通年	54	9(102)	
自主活動支援	通年	36	(1168) Vo(398)	
地域連携事業	通年	39	(1995)	
相談事業 ユースクリニック	通年(毎週木曜)	36	(148)	
サポートステーション職業体験事業	9月	6	3(18)	
中学生学習支援事業 STEP	通年(毎週木曜)	52	9(113) Vo10(108)	
中学生学習支援事業 向島ぷらす	通年(毎週土曜)	49	3(110) Vo2(31)	伏見区向島地域
中学生学習支援事業 深草町家	通年(毎週木曜)	53	(181) Vo7(379)	伏見区深草地域
中学生学習支援事業 月曜学習会	1～3月(毎週月曜)	10	3(7) Vo9(23)	
フリータイムスポーツ	通年	305	(5073)	
フリータイムダンス	土・日・祝	73	(118)	
外国人の若者のためのスポーツデイ	10～3月(月1回日曜)	4	18(23)	

Ⅱ－8 子ども・若者総合相談窓口

今年度から、協会が担ってきた各種支援機能を「ケア・連携支援室（以下、室）」として統合し、若者サポートステーションや施設退所者に関する相談を含めた総合的なワンストップ窓口として運営を開始した。

また、センター利用者との関わりが難しいケースや、より専門的な支援が必要となるケースについては、相談の質を高めるために、室の専門相談員の視点も踏まえて総合的に判断できる体制を検討した。これにより、ケース対応に必要な情報をセンターと共有しながら、より適切な支援につなげられる仕組みづくりを模索した。

1. 子ども・若者総合相談の実施

① 子ども・若者総合相談の実施

- 新規相談件数は、708件となり、昨年度より205件増加した。前年度からの継続ケースも含んだ相談件数は716件であった。延べ相談回数は、1,046回と昨年度より98回増加した。
- 相談者別の内訳は、716件に対し、本人が412件（58%）、父または母が129件（18%）、両親以外の家族が9件（1%）、その他が11件（2%）、関係機関（内部）が32件（4%）、関係機関（外部）が123件（17%）であった。相談内容別では「就労」が182件（25%）と最も多く、次いで「将来・進路」「家庭内の問題」が112件（16%）、「健康・障害」が73件（10%）であった。年代別では、20歳未満が178件（25%）、20代が304件（42%）、30代が132件（18%）、40代以上が102件（5%）、不明が65件（9%）であった。
- 対象者の困難要因（複数回答可）では、家族関係242件、次いでメンタル207件、人間関係196件、精神障害184件の順に多かった。
- 昨年度に引き続き、インテークやアセスメント、対応等、援助技術の向上を図るため神戸松蔭女子学院大学から家族療法専門の臨床心理士の教授を招き、スーパービジョンを実施し、研鑽を行った（年10回）。中央青少年活動センターの職員も研鑽のため参加した。

② 寄り添い型継続支援事業（中央青少年活動センター事業）（再掲）

- 室の機能の整理に伴い、就労支援以外の継続的に支援が必要なケースを寄り添い型継続支援事業の枠組みとした。その結果、昨年度の4件から30件に増加。対応数も296回と増加した。家庭訪問や同行などアウトリーチによる支援も必要に応じて実施した。

2. 広報・連携事業

- 子ども・若者総合相談窓口の認知拡大の為、チラシと広報カードを京都市立の全中学、高校の新1年生に配布した。

3. 支援事業一元化プロジェクト

- 相談者の困り感に応じて、若者サポートステーションやケア事業の機能紹介、内部リファーを適宜行い、窓口・サポステ・ケア事業の一体的な運用を進めることができた。これにより、若者の状況に応じた適切な支援に繋げる体制が強化され、事業間の連携を踏まえたスムーズな支援提供が可能となった。
- 支援系事業をまたいで包括的なサポートを行うため、共通の記録方法を取り入れ、共有・確認できる仕組みを作ったほか、記録のクラウド化の準備を行った。実際の運用は、次年度から開始予定である。
- 協会内部の機関連携として、クラウド上に活動センターとケア・支援連携室をつなぐ相談専用板を作成し、各センターが対応に苦慮するケースなどを発信、共に検討できる仕組みを整えた。既存の支援継続ケースも含め、センターとタイムレスに情報共有・相談ができるようになり、より迅速、的確に支援につなげられるようになった。

Ⅱ－９ 生活保護等生活困窮世帯の子どもに対する学習支援業務

家庭での学習環境が整いにくい中学生等を対象とした学習支援事業を、通年で全18拠点と受験期となる下半期に4拠点で週2回目開催という位置づけで実施した。学生を中心としたボランティアが、原則一対一の体制で関係性をベースとした安全な居場所づくりと、学習サポートを行った。

夏休み学習会は計14日間開催し、長期休暇中の学習ニーズ、居場所ニーズに概ね応えることができた。軽食提供やフードパントリーを組み合わせることで、長期休暇中の食事面でのサポートにもつながった。一方で、ボランティアの確保には苦慮し、学習者とのバランスがとれず運営が難しい日もあった。

登録者数は、昨年度比で学習者・ボランティアともに減少(学習者－50名、ボランティア－67名)し、延べ参加者数についても減少(学習者－475名、ボランティア－769名)した。学習者については対象者の把握に努め、適切な案内ができるよう工夫するほか、ボランティアについては大学への広報やオンラインでの広報に力を入れ、募っていく必要がある。

新規のボランティア希望者には継続的に説明会の機会を設け、各拠点で活動する既存ボランティアには研修機会を設定し、安全な学習会運営に努めた。ボランティア希望者には、ボランティア説明会や個別対応を随時行ってきたが、立地や曜日の都合でボランティア希望者が集まらない学習会もあり、ボランティアの確保に苦慮するところもあった。

研修面では、ボランティア研修を年4回実施し、学習者とボランティアが安全に活動に参加できるように距離感をテーマに学びを深めたほか、京都市・府の受験制度や、学習指導について学びを深める時間を持った。年度の後半にはボランティアへの感謝を示す感謝祭を実施し、他拠点のボランティア同士が交流する時間を設けた。有志のボランティアらが自らテーマを設定して取り組む自主ゼミを実施した。

1. 学習会18拠点の運営

○学習会登録状況 231名(小:11名、中:134名、高:82名、他:4名) 延べ参加者数3,555名

＊重複登録15名含む

＊前年度登録者数281名、延べ4,030名

○ボランティア登録者数 226名 延べ参加者数2,984名

＊前年度登録者数293名 延べ参加者数3,753名

2. ボランティア説明会

4～3月、主に毎月第3日曜日定例開催(定例12回)、夏休み学習会ボランティア説明会を2回、その他個別対応を随時実施。年間を通して全体で47名以上の応募・問い合わせに対応した。

3. ボランティア研修・交流会

全拠点の学習会ボランティアを対象に、研修と交流会をセットで年4回、コーディネーターや職員も参加する形で実施した。

①2025年7月13日(日)14:00～17:00@中央青少年活動センター

「みんなが楽しく安心できる学習会のために～中学生との距離感を考える～」

ケア・支援連携室よりワーカーの古田を講師にレクチャーを実施。自他の境界線を指す「バウンダリー」について、例えば中学生が「勉強したくない」と言うとき、その背景にある気持ちや課題を「本人」「親」「社会」という風に分けて整理していくことで、本人理解や自己決定を支えることにつながると紹介。また、中学生よりもボランティアが年齢や経験ともにパワーを持っている存在であることを自覚する必要性についても述べられた。後半は、中学生が帰るケースを、「先輩ボランティアとして後輩ボランティアにフィードバックするなら？」という視点でケース検討し、前半のレクチャー要素を取り込みながら、講師を交えた全体共有を行った。

②2025年9月2日(火)13:30～15:30@中央青少年活動センター

「京都市・府の受験制度について～2027年度の新選抜制度を見据えて～」

1部:京都市府の受験制度について

講師:榎本俊秀氏(京都市教育委員会事務局 指導部 学校指導課 専門主事)

2部:受験生との関わりについて各拠点での困りごと・工夫している点の共有

昨年度はオンライン開催であったが、今回は対面で実施した。1部では、榎本氏より受験制度の研修を受け、新選抜制度を重点的に取り上げていただいた。2部では、小グループに分かれ、各拠点の状況や受験に関する困りごとの共有と話し合いの時間とした。市教委より榎本氏の他に3名ご出席くださり、小グループから出た質問に対し、個別でご対応くださったことで、「その場で聞けて良かった」等の声も多く、各拠点の困り感の緩和にもつながった。

③2025年10月19日(日)15:30～17:00@中央青少年活動センター

「共感と信頼でつなぐ学習支援～ボランティアのための80分指導力アップ研修～」

株式会社京都洛西予備校の協力を得て、学習指導における心構えや配慮事項について学ぶ機会として設定し、3名の参加があった。指導には信頼関係の構築が前提となるとの講義があり、信頼を獲得するために大切なことについて、心理学や格言を用いてレクチャーがあった。質疑応答では、英単語や漢字の暗記方法等の学習方法や、中学生への声掛けについて助言があった。参加したボランティアからは、「中学生の頑張りを言葉できちんと褒めるようにしたい」「塾と学習会では違いもあると思うが、中学生から信頼してもらえるように頑張っていきたい」との感想があった。

4. コーディネーター・担当者会

各拠点の担当職員及びコーディネーターの合同会議を実施(年1回)。また個別に各拠点運営担当者と事務局とで随時情報共有・協議の機会を持った。

5. 自主ゼミ

ボランティア・コーディネーター・職員を対象に、現場で出会う疑問や発見をもとに意見を交わす場として実施した。ミーティングやイベント準備を含め計5回実施。

今年度は西京、右京学習会のコーディネーターが継続して参加。共通の困り感であったコーディネーターとして「ボランティアと円滑に、学習者に還元されるべくかかわるには？」というテーマを取り扱った。他拠点のコーディネーターの運営やかかわりを参考にできればと、「コーディネーターもやもや共有座談会」や、他拠点へのヒアリングを企画。座談会は参加者が集まらず、ヒアリングはコーディネーター本人の就職等でスケジュール都合がつけられず未実施となったが、参加者の課題感を整理し、相対化することで、現場での役割を見つめ直す時間になった。

6. 夏休み学習会

＊実施期間:8月2日(木)～8月23日(土)のうち14日間

通常の学習会とは別に、市内6カ所の拠点で夏休み学習会を実施した。うち1日は、中京学習会を共に運営している学習支援団体Apolonの協力を得て、レクリエーションを伴う特別会として実施した。学校が休みの夏休み期間に、家庭以外の居場所や夏休みの宿題・受験勉強のための学習環境を提供することを目的に開催し、長期休暇中の学習ニーズ、居場所ニーズに応えることができた。参加者からは「夏休みの宿題を教えてもらえて良かった」、「1人では難しい夏休み課題に取り組めて、終わらせることができた」等の声があった。また、フードパントリーを活用して全日程で食料品の配布を行なったほか、夏休みの最終週には昼食を共にする運営形態をとることで長期休暇中の食事面を一部サポートすることができた。その他、寄付でいただいた生理用品の配布にも取り組んだ。経済的な理由等から、生理用品を入手することが困難な状態にある「生理の貧困」と夏休み学習会の参加者層が重なる可能性が高いことから、必要とする人が持ち帰れるようにした。運営には、ボランティア経験のある1名を有償インターンとして受け入れたほか、大学コンソーシアム京都からのインターン生も2名受入れ、若者支援の現場を経験してもらうことができた。

7. 週2回目拠点の運営

会場定員問題や、受験に向けてのニーズへの応答として、4拠点(北・西京・伏見・中京)にて週2回目の学習会を開催した。

8. 模擬試験受験費用補助

模擬試験受験費用補助

学習会に登録している中学3年生を対象に、模擬試験の受験にかかる費用の補助を行なった。計30名の利用があり、保護者からは「受験料が高いので助かった」との声があった。各学習会では、模擬試験の結果を元に進路について話をする機会ができたほか、解き直しを行なって学習を進める様子が見られた。

9. 広報

これまでの実績や取組について、学習者・ボランティア募集・市民認知の向上ための発信として下記に取り組んだ。

- ①対象世帯向けのパンフレット作成、児童扶養手当現況届の案内への同封
- ②ボランティア募集パンフレットを大学ボランティアセンター等に配架依頼
- ③対象者向け／ボランティア向けホームページの整備
- ④その他:大学等での講師派遣依頼等において、実践紹介

Ⅱ－10 社会的養護自立支援事業に係る生活相談等支援事業

児童養護施設等、社会的養護のもとで暮らしてきた若者たちの退所後・措置解除後の生活を支えるため、ユースサービスの強みを生かした事業に取り組んだ。また、全国ネットワーク「えんじゅ」年次大会を京都で開催したことにより、他都市のアフターケア事業所とも密に情報交換できた1年となった。

1. 研修の実施に関すること

① 自立支援担当者会

担当職員及び社会的養育にかかわる職員対象に隔月の定例会を実施した。

- ・第1回 5月9日(金)28名
京都市の事業概説と現状について／ユースサービス協会から(報告・概説)／
京都府社協より、退所者に向けた貸付・給付型事業の紹介
- ・第2回 7月11日(金)26名 13:00～15:30
事例検討会
- ・第3回 9月12日(金)21名 13:00～15:30
事例検討会
- ・第4回 11月14日(金)25名 13:00～15:30
事例検討会
- ・第5回 12月12日(金)28名 ※13:00～17:00と時間を拡大して開催
 - ①【講演】「児童自立生活援助事業Ⅱ型の制度設計と現場運用、人材育成」について
講師:霜 大輝氏
 - ②【講演】「退所者支援を行う職員のセルフケア」について
講師:佐野 浩子氏
- ・第6回 2月13日(金)30名 13:00～15:30
 - ①【講演】「京都市における困難女性」について
講師:京都市女性のための相談支援センター みんなと相談員
(京都市 文化市民局 共生社会推進室 男女共同参画推進担当)
 - ②【講演】「京都市における生活困窮者自立支援制度」について
講師:森田 祥光氏(保健福祉局 福祉のまちづくり推進室 生活困窮者自立支援担当)

② 協会内部研修

入職1年目の新人職員を対象とした研修にて、事業概況や対象者がどんな困難さを有しているか概説を行った。

2. 相談支援に関すること

① 対象者からの相談:112件338回(前年度:77件239回) ※退所者・措置解除後とわかった件数のみ計上

- ・内容:人間関係、進学・学校生活・就学継続、就労・休職・離転職、お金・生活保護、家出、居住、恋愛・結婚、妊娠、親子・家族関係、虐待、心身の健康・入院、生き方、自主活動、余暇の過ごし方、居場所、友だちづくり、食糧支援、同行支援など。
- ・必要に応じて、ケース会議や自立支援担当者と本人との定期面談に臨んだ。
- ・分析:「いいいーな」での生活相談に加え、若者が自由に立ち寄れる青少年活動センターとしての機能を活かすことで、20歳以上の社会的養護経験者と日常的に出会い、関わる中で生活上の困難や悩みに触れる機会をもつことができた。また、内部体制として相談支援部門を統合し、一体的な運営を行ったことで、昨年度は拾いきれなかった相談ニーズにも対応できるようになり、相談の受け皿が広がった。これらの要因が相まって、相談件数および相談回数は前年度より大幅に増加した。

② 入所中・関係機関からの相談

- ・「自立支援担当者会」等を通じて各施設の自立支援担当者と顔の見える関係が深まったことで、退所前の段階から当協会の役割や支援内容を退所予定者へ説明する機会を設けることができた。また、退所後に府外へ転出するケースに対して、受け入れ先となる支援機関に関する相談を受けるなど、当事者の余暇支援を含む幅広い相談ができる関係性が構築されつつあると実感している。

③ 備考

- ・昨年度と同様、企業やフードバンク等から寄付された物品を、相談のきっかけづくりや緊急支援の場面で提供した。また、自立支援担当者会では、参加者が自由に持ち帰れる形で寄付物品を活用した。さらに、「えんじゅ」の助成金を活用し、交通事故や奨学金返済などにより生活が困窮した当事者に対して、緊急生活費の給付を実施した。

3. 交流会の運営及び実施に関すること

①事業名: いこいーな

日程: 毎月第3土曜日18時～21時 合計11回(7月は参加者がいなかったため、中止)

場所: 京都市南青少年活動センター

内容: 退所者にとって居場所として活用し、ご飯を食べられる場を運営した。(全回対面開催)

参加者数: 延べ39名(実数6名)

備考: 交流促進を主目的としていた時期から、参加者が落ち着いて過ごせる「居場所づくり」へと事業の方向性を転換したことで、それぞれが自分のペースで過ごせる環境を整えることができた。一人ひとりの安全に配慮することを心がけた結果、パートナーへの不満や仕事の定着状況など、日常生活に関する雑談を含む相談が自然に行われるようになり、参加者の生活状況を把握しやすい場となった。また、年齢制限を設けて参加対象を整理した後も、過去の参加者とは年に1～2回程度連絡を取り続けるなど、関係が途切れない緩やかなつながりを維持することができた。

4. 入所児童向け講習会の実施

①訪問講習会

テーマ: 「お金」「はたらく」「性」「ひとり暮らし体験」「他」より、施設からの希望選択制

内容: チェックイン、テーマに合わせた講義、ワークと対話、船出のためのナビ活用

・6月20日(金) 東山ファミリーホーム「性に関する講義とワークショップ」参加6名

・8月 1日(金) 野菊荘「性に関する講義とワークショップ」参加21名

講師: 前田 絢子氏(看護師・助産師)

・9月16日(火) 積慶園「契約について」参加9名

・2月14日(土) くまちゃんの家ホーム「性に関するワークショップ」参加3名

講師: 前田 絢子氏(看護師・助産師)

・ひとり暮らし体験 市内1Kアパートでの自活体験 延べ11回実施(50泊61日)

5. 関係機関との連絡調整に関すること

①事業運営にあたり必要な関係機関との調整、関係づくり

主だった関係機関は以下のとおり

- ・京都児童養護施設長会(挨拶・報告)
- ・京都市児童相談所／区はぐみ室
- ・こども家庭庁(アンケート・ヒアリング協力)
- ・京都府家庭支援総合センター／寄り添い支援チーム
- ・アフターケア「メヌエット」(情報共有・連携に向けた打ち合わせ)
- ・京都府社会福祉協議会(退所者に向けた事業案内、ケース共有 等)
- ・全国アフターケアネットワーク「えんじゅ」(年次大会会場運営協力・研修講師の選定協力・助成金案内 等)
- ・公益財団法人 京都YWCA(情報交換等)
- ・一般社団法人 京都わかさねっと(生活物資サービス利用)
- ・合同会社セブンスターズ(物件紹介等)
- ・認定NPO法人 セカンドハーベスト京都(フードバンク利用)
- ・滋賀県地域養護推進協議会(支援連携・情報交換・視察受け入れ)
- ・認定NPO法人D×P(支援連携、サービス利用)
- ・京都ユースホステル協会(焚き火旅の体験機会)

②協会資源を活かした内部連携

- ・青少年活動センター事業への参加や施設利用があった。
- ・相談ケースの中で継続的な関わりが必要なケースにおいて、内部資源(青少年活動センター、子ども・若者総合相談窓口や京都若者サポートステーション、おりおりのいえ など)を活かした支援・連携を行った。
- ・継続支援ケースについて、昨年度同様内部共有や役割分担をしながら対応した。

②協会資源を活かした内部連携

- ・全国アフターケアネットワーク「えんじゅ」の助成金を活用し、デートDVの予防啓発を目的としたツール「DVかるた」を作成した。助産師監修のもと、「身体的暴力」「精神的暴力」「経済的暴力」「性的暴力」「行動制限」「境界線」の6分類に基づき読み札を構成したもので、今後は入所児童訪問講習会等など、若者への啓発の場での活用を予定している。

Ⅲ 京都若者サポートステーション受託事業（厚生労働省及び京都市委託）

全体の動向

無業状態の15歳から49歳までの学籍のない若者（※一部例外あり）に対し、職業的自立に向けた支援を行う事業として、厚生労働省および京都市より委託を受け、運営した。新規登録ケースの約半数以上が就労・福祉などの支援機関からの紹介であり、新規登録者数は目標200名に対し244名（122%）となった。一方で、就職等数は目標142名に対し133名（93%）であった。障害、家族関係、生活困窮など複合的な課題のある若者に対しては、ケア・支援連携室（子ども・若者総合相談窓口やケア事業）と連携した支援を実施した。また、新たに配置された「地域連携支援コーディネーター」の存在も相まって、支援機関との相互連携や、協会内外でのチーム支援を展開した。医療機関や専門・相談機関への早期のリファーも進み、一般就労に限らず、福祉就労、職業訓練、就労移行支援事業所など、多様な働き方・進路に向けた支援が可能となっている。

出口支援においては、利用者の目的や準備段階が多様であることを踏まえ、ハローワークの専門コーナー（若年、ミドルシニア、障害）やジョブパーク等と連携し、役割に応じた支援を展開した。また、登録者の段階に応じてテーマを設定し、課題に応じたプログラムを実施した。軽作業を取り入れたグループワークやジョブトレーニング（短期の就労体験）を活用し、実務的な仕事の体験と振り返りを通して適職に関する自己理解を促し、就業準備段階のステップアップを図ることができた。

1. 個別相談支援事業

① インテーク・プランニング面談

○ユースワーカー及び相談員が状況の聞き取りを行うインテーク面談を実施。プランニング面談にて、就労に向かうにあたっての課題の整理や、それらの課題を解決するために必要な支援の整理・役割分担を行い、サポステ内外における支援プランを作成し、専門相談へのつなぎや、外部機関との連携に取り組んだ。

② サポステオリエンテーション

○就労に向けたステップ、サポステの利用方法や実施するプログラムの内容について紹介を行った。緊張感の高い人に向けての、短めで課題別に対してのプログラム説明を中心に行うものを別日に実施した。

③ 専門相談・個別支援

○専門相談員である臨床心理士によるこころの相談、キャリアコンサルタントによるキャリアの相談、地域連携支援コーディネーターによる相談、支援機関等との連携を行った。

④ 定着・ステップアップ支援

○専門相談・個別支援を通して、定着・ステップアップに向けた継続的な支援を実施した。また、継続利用のない利用者に対しても様子伺いを行い、必要に応じて相談につながるような関係維持を図った。

2. 就活基礎力

① サウナワーク（サポステウキウキナカヨシワーク）

○サポステ内外の資源を活用し、軽作業を実施。役割分担をしながら、チームで仕事をする体験機会として、協会事務局や青少年活動センター、外部連携機関と連携を行い、軽作業活動を実施した。また、月1回のチラシ発送等を用いて、役割分担をしながら、チームで仕事することを体験的に理解できるよう実施した。

② キモチとカタチの働くBASE

○コミュニケーションへの不慣れさ、苦手意識だけでなく、体調の波、気分の浮き沈み、漠然とした不安など、多種多様な課題やニーズに応じ、「コミュニケーション」「セルフケア」「アサーション」「モチベーション」「ビジネスマナー」「ビジネスコミュニケーション」「女子会」等の内容を実施した。

③ 身体表現を用いたコミュニケーションワーク（東山センター）

○即興でのダンスの手法を用いて、表現することを体験的に学ぶプログラムを実施した。

④ 働くまへのコミュニケーションワーク（山科センター）

○インプロビゼーション（即興演劇）の手法を用いて、表現することを体験的に学ぶプログラムを実施した。

3. 就活実践力

① 就活準備プログラム

○就職活動についての基礎的な知識の獲得を目指し、労働基準法や、社会保険の解説、履歴書の書き方などのセミナーを実施した。

4. 就業体験事業

①ジョブトレーニング

○ちまき製作、柚子加工、介護補助など、地域や企業の協力を得て実施する短期就労体験を実施した。

②ハタプロ(南センター)

○青少年活動センターと連携して、地域の農家の協力を得て実施する単発の農業体験を実施した。

③センター就労体験「アジプロ」(伏見・下京センター)

○青少年活動センター内での就労体験プログラム(伏見・下京)を実施。丁寧に体験をふりかえるプロセスを踏むようにした。

④仕事について、聞く、見る・やってみるプログラム

○NPO法人いっぽねっとの協力を得て、サポステ利用者と中小企業経営者との交流会、職場見学会を実施。交流や見学を通して、企業側の視点を獲得機会を作った。また、他サポステと協働で、企業家や就労したサポステ利用者から話を聞く職業に関する講話を実施した。

⑤職場体験プログラム

○中小企業家同友会・就労支援ネットワークNPO法人いっぽねっとな、その他企業、法人の協力を得て実施。4名が体験に参加した。

⑥求人活用型ステップアッププログラム

○週20時間未満または31日未満の雇用契約を伴う就労を活用して実施することを目指し、京都労働局やハローワークへの枠組みの説明と調整を行った。

5. サポステ認知拡大・新規登録者獲得・関係機関との「顔の見える」関係構築事業

①地域出前相談会

○ハローワーク京都七条、西陣ハローワーク烏丸御池庁舎での出張相談・セミナーを実施した。また、京都わかものハローワークでは就職活動の困りごと相談会として個別相談を実施。ハローワークからの紹介の入口として、参加者のサポステ登録につながった。

②広報事業

○支援機関等に定期的な情報発信を行ったほか、ハローワークや支援機関に対して、サポステ利用に関する説明会を実施した。

③学校連携

○高校連携専用窓口の設置、大学・高校等との連携体制づくりなど、卒後進路未決定者、中退者等への支援を実施。通信制高校において講話を実施した。

④他機関連携

○ケース連携をはじめ、関係機関との相互連携を深めたほか、京都市内5箇所のハローワークで窓口相談員向け説明会を実施した。また、伏見ハローワークでの出前相談に向けて、調整を行った。無業状態の我が子との関わり方に悩む保護者が、捉え方・かかわり方を学ぶ家族向け研修会・交流会(主催:京都市)の実施に協力した。

6. 常設サテライトの運営

①インテーク面談、専門相談・個別支援、定着ステップアップ支援

○個別相談支援、出張相談等の事業を実施。地域のネットワークと連携した支援を展開した。

②就活基礎力(コミュニケーションワーク、緊張とストレス対策プログラム)

○前述の就活基礎力を元にしたプログラムを実施した。

<行事一覧>

事業名	実施期間	回数	参加者(のべ数)	備考／実施場所等
サポステオリエンテーション	4～3月	21	62	
サウナワーク	4～3月	68	353	北・南センター
キモチとカタチの働くBASE	4～3月	41	123	
身体表現を用いたコミュニケーションワーク	11月／2月	10	31	東山センター
働くまえのコミュニケーションワーク	9月	4	20	山科センター
就活準備プログラム	4～3月	12	40	
ジョブトレーニング	4～3月	69	158	下京センター含
ハタプロ(南センター)	2月	1	2	ハタプロ=桂川
センター就労体験「アジプロ」	4～8月／2～3月	12	42	伏見・下京センター
仕事について、聞く、見る・やってみるプログラム	7月・9月・11月・1月	6	35	
職場体験プログラム	4月～3月	43	43	